In Sarsyn speche
—中英語ロマンスにおける多言語の諸相—*

In Sarsyn speche: Multilingual Aspects in Middle English Romances

西 村 秀 夫
(Hideo Nishimura)

1. はじめに

中世後期イングランドにおける多言語の状況について英語史概説書の多くが述べるところを要約すれば、「ラテン語が宗教、学問、教育、法律、文学などさまざまな分野で用いられたのに対し、ノルマン征服以後、上流階級の威信ある日常語(prestige vernacular)として用いられたフランス語は 13 世紀以降、より洗練された文化を伝える言語として学習されるものになると同時に、行政、法律、教育などの記録言語として、また書簡などの言語として、公的場面、私的場面の両方で使われた。これに対し、フランス語とは無縁な人々の話し言葉として使われていた英語は、フランス語の威信低下、中産階級の地位向上とともに徐々に威信を獲得し、初期近代英語期には新しい標準語としての地位を獲得した」となるであろう。中世イングランドにおける英仏二言語併用の状況については、例えば Baugh and Cable (2013[6]: 118–19)が「12 世紀末には、ふだんフランス語を使っている人びとが英語を知っているのは別段珍しくもなかったし、聖職者や教育ある人びとは英語を知っているのが当然とされていたし、仕事のために上層下層両階級と接触する人びとの間では英仏両語を話せるのは全く普通であった[1]」と述べている。

ここで言う二言語使用者が実際にどのようなテキストを産出していたかを概説書から具体的に知ることは難しい。Baugh and Cable (2013[6])では第 6 章「英語

の復権、1200–1500 年(The Reestablishment of English, 1200–1500)」の第 107 節「15 世紀におけるフランス語の知識の低下(Increasing Ignorance of French in the Fifteenth Century)」において、ウインザーの首席司祭 Richard Kingston が 1403 年に国王 Henry 4 世に宛てて書いた手紙の一部が注 87 で紹介されているぐらいである(145–46)。

(1)　Baugh and Cable (2013[6]: 146)[2]

"Jeo prie a la Benoit Trinite que vous ottroie bone vie ove tresentier sauntee a treslonge durre, **and sende ȝowe sone to ows in help and prosperitee; for, in god fey, I hope to Al Mighty God that, ȝef ȝe come ȝoure owne persone, ȝe schulle have the victorie of alle ȝoure enemyes.**

"And for salvation of ȝoure Schire and Marches al aboute, treste ȝe nought to no Leutenaunt.

"Escript a Hereford, en tresgraunte haste, a trois de la clocke apres noone, le tierce jour de Septembre."

(「全くの健康を伴った良き生活を陛下にいつまでもお恵み下さり、陛下を御健勝御清栄のうちに私どものところへ直ちにお送り下さいますように、至福なる三位一体にお祈りします。と申しますのも、本当に、全能の神にお願い致しますが、もし陛下が御自身でおいで下さいますならば、陛下は必ずやすべての敵に打ち勝たれるでしょうから。

「そして陛下の州や辺境一帯の救済に関しては、決して代理人を信用なさってはなりません。

「9 月 3 日、午後 3 時、Hereford にて大急ぎで記す。」)

Baugh and Cable はこの手紙について「慣習を重んじて司祭は勇敢にもフランス語で手紙を書き始めたが、終わりの方で特に熱がこもってくると、文章の途中で彼は本能的にフランス語から英語に移行しているのである [3]」と述べるとともに、注 87 の冒頭で「この手紙の末尾は奇妙な仏英混交文になっている [4]」と記している。

「**奇妙な**仏英混交文」という表現が端的に示すように、言語の混交(language-mixing)が生じているテキストは、書き手(著者ないし筆写者)の側の不十分な言語能力を示すものとしてこれまで低く見られる傾向にあった。しかしながら、コーパス言語学、歴史社会言語学、歴史語用論の進展や社会言語学の知見の援用などにより、1990 年代以降、中英語から初期近代英語期における言語接触(language contact)やコード切り替え(code-switching)に対する関心が高まり、これまでの考え方は見直されつつある[5]。

Schendl (2012: 28)はコード切り替えによる言語の混交が生じたテキストの出現には、テキストのタイプ・ジャンル、フォーマル度、テキストの目的、想定される受容者、成立年代などさまざまな要因が関係することを指摘したうえで、文学的な(literary)テキストおよび非文学的な(non-literary)なテキストのそれぞれについて、以下のようなテキストタイプにコード切り替えが見られたことを指摘している。

(2) Schendl (2012: 28)

i. Literary texts:

mixed ('macaronic') poems (OE, ME, EModE)

longer verse pieces (ME, EModE)

drama (ME, EModE)

various prose texts such as travel accounts, etc. (ME, EModE)

ii. Non-literary texts:

legal and administrative texts (OE, ME, EModE)

business accounts (ME, EModE)

scientific and medical texts, including recipes (ME, EModE)

sermons (ME, EModE)

religious prose texts (ME)

'private' prose such as letters and diaries (ME, EModE)

Schendl はさらにコード切り替えを含むテキストは 8 世紀から現代まで続くこと、大半のテキストが 13 世紀から 15 世紀に作られていることを指摘している。

本稿では以上述べた最近の研究の動向を踏まえて、Chaucer との関連で中英語ロマンスに見られる多言語的要素を考察する。

2. In romaunce as we rede (*Sir Launfal* 741)

中英語ロマンスを読んでいると、'In romaunce as we rede'やそれに類似した表現をしばしば目にする。Laskaya and Salisbury (eds.) (1995: 257)は *Sir Launfal* 741 行に現れるこの表現に対し以下のような注を与えている。

(3)　Laskaya and Salisbury (eds.) (1995: 257)

Romances often make reference to sources (real or imagined), as if to lend credence to the tale. The device is also found in early English hagiography and late classical literature.

MED (rōmaunce (n.))は(4)に示すように、1.(b)において Laskaya and Salisbury と同様の定義を与えるとともに、3.において'The French language'という定義を与えている。

(4)　*MED*, rōmaunce (n.)（引用例抜粋）

1. (b) the source, real or alleged, of an English chivalric romance or verse narrative;

a1450(a1400) ***Athelston*** **(Cai 175/96)**　383: In romaunce as we rede..On Londone–brygge ded doun felle Þe messangeres stede.

1457 ***Libeaus*** **(Naples 13.B.29)**　291/2196: As in romaunce [Lamb: the Frensshe tale] it is tolde.

3. The French language; ~ **bok**, a book written in French; **in (on)** ~, in French.

c1450(c1400) ***Sultan Bab.*****(Gar 140)**　25: Kinge Lowes witnessith þat cas, As it is wryten in Romaunce And founden in bokes of Antiquyte.

中英語ロマンスの多くにフランス語(特にアングロ・ノルマン語)で書かれた原典が存在する(と想定されている)ことを考えると、'In romaunce as we rede'における romaunce の中核的な意味は「フランス語で書かれた(ロマンスの)物語」と考えてよいであろう。このことは *Sir Launfal* 474 に 'Thus seyd the Frenssch tale'という表現があることからも裏付けられる。原典との距離・関係は個々の作品において異なるが、中英語ロマンスの多くにはフランス語が付いて回る可能性が高いことには留意しておく必要がある。

3. *Sir Thopas* 897–902

Chaucer は『カンタベリー物語』の中で romaunce という語を単数形で 1 回、複数形で 2 回用いている。単数形は「貿易商人の話」で『薔薇物語』に言及する際に現れるのに対し、複数形の 2 例はともに「騎士道ロマンス」の意味で「トパス卿の話」に現れる。2 例のうちの 1 つを以下に示す(残る 1 例は 848 行に現れる)。

(5) *Sir Thopas* 897–902

Men speken of **romances** of prys,
Of Horn child and of Ypotys,
Of Beves and sir Gy,
Of sir Lybeux and Pleyndamour—
But sir Thopas, he bereth the flour
Of roial chivalry!

このスタンザは、Chaucer が同時代の騎士道ロマンスに精通していたことだけでなく、彼の聴衆たちがここに挙がっている固有名詞から想起するであろうイメージを Chaucer 自身が十分に承知していたことを示すものと解釈されている。

Horn, Beves, Gy (Guy), Lybeux (Libeaus)はロマンスの主人公である。Ypotys は

中世で広く知られた伝説の主人公で、皇帝 Hadrian に一連の問答を通じてキリスト教の教義を教えたとされる子どもの名前である。この伝説がロマンス作品と並んで収められた写本が他にも見られる。Pleyndamour は不詳であるが、Chaucer が Eglamour, Triamour などに倣って作り出した架空の名前という見方が有力である。

Horn, Beves, Gy を主人公とするロマンスは Chaucer と同時代の Auchinleck 写本に含まれており、Chaucer がこの写本、あるいはそれに近い形のものを手にした可能性があると考えられている。また Charbonneau (2005: 653–54)は、*Bevis, Guy, Horn Childe* のほか、同じ写本に含まれる *Amis and Amiloun, Sir Degare, King Alisaunder, Otuel, King Richard, Reinbrun* も *Sir Thopas* の材源・類話と考えられること、さらに *Ypotys* と *Lybeaus Desconus* のほかに MS Cotton Caligula A.ii に含まれる *Thomas of Erceldoune, Sir Launfal, Octavian, Sir Eglamour of Artois* も *Sir Thopas* の材源・類話と考えられ、Chaucer がこの写本のプロトタイプ的なものを見ていた可能性があることを指摘している。

4.　Auchinleck 写本に見られる多言語的要素

Summerfield (2013)は、Auchinleck 写本中のフランス語やラテン語などの外国語を含む数少ないテキストを調査し、コード切り替えなどの多言語的要素を明らかにしているが、ここでは本稿との関連でフランス語系語彙の使用についてその論点を簡単に紹介しておく。

Summerfield (2013: 251)は、ロマンスの作者がある特定の人間や集団を表すために特徴的な語彙を用いていることを *The Romance of Richard* から例を引いて明らかにしている。この作品においてフランス王 Philip は、頼りなく、弱気で、臆病者として描かれ、作品の中ではもっぱらフランス語を話す。(6)は Philip が Richard 王から臣下の侯爵を処刑すると脅しを受けた場面である。

(6)　*The Romance of Richard* 3275–80

Þenne answeryd þe Kyng off Fraunce

In Sarsyn speche

To Kyng Richard wiþouten **destaunce**:

'A suffre, Sere, bele amys,

Þou hast wrong, **Sere,** be Seynt **Denys,**

Þat þou þretyst þat markys

Þat þe neuere ȝit dede amis.'

[Then answered the king of France to King Richard in a friendly manner: 'Wait a moment, sir, dear friend, you are wrong, sir, by St Denis, that you threaten that marquis who never yet did you any wrong.']

Summerfield (2013: 253)は(6)の引用においてボールド体で示した語句がフランス語的な雰囲気を醸し出しているとし、destaunce, suffre の 2 語について *AND* に基づいて、それぞれ'discord, quarrel,' 'to wait, be patient' という語義を与えている。さらにこのような詩行は、熟達した演者に強いフランス語の訛り(accent)を伴った臨場感のあるパフォーマンスを行う機会を提供することになったであろうとも述べている。

Summerfield は指摘していないが、上述の 2 語は実は *MED* を用いて解釈することも可能である(この箇所の suffre は *MED* で引用されている)。

(7) *AND* vs. *MED*

i. destaunce: discord, quarrel (*AND,* destance s.1)

Disagreement, discord, strife (*MED*, distaunce (n.) 1. (a))

ii. suffre: to wait, be patient (*AND*, suffrir v.a.12)

To be long-suffering, forbear, refrain; defer vengeance or punishment, forbear for a while; also, desist (*MED*, sufferen (v.) 4b. (1))

ここに中世後期イングランドにおける複雑な言語状況を見ることができる。Trotter (2006: 74)はアングロ・ノルマン語と中英語を明確に区別することが困難であること、*MED* の引用文、さらには見出し語までがアングロ・ノルマン語の辞書に見られることを指摘する。また Schendl (2000: 86)は多くの語について、

借用かコード切り替えかを判定することが難しいことを指摘する。さらにSchendl (2013: 48)では多言語の話者にとって、借用とコード切り替えは連続体をなすものであったと述べられている。

このような状況を念頭に置いた上で、以下、MS Cotton Caligula A.ii について検討していく。

5. *Octovian Imperator* に見られる多言語的要素

MS Cotton Caligula A.ii に唯一現存する *Sir Launfal* の最後で自ら作者として名乗りを挙げる Thomas Chestre は、同じ写本でこのロマンスの前後に置かれた 2 つのロマンス、*Octovian Imperator* および *Lybeaus Desconus* の作者でもあると考えられている。また、Chestre は Chaucer と知り合いであった可能性があることも指摘されている[6]。本稿では以下、これら 3 作品のうち *Octovian Imperator* を「多言語」という視点から読み直し、Chaucer と同時代のロマンス作者およびこの作品の受容者(聴衆)にとっての多言語の状況について考えてみたい。

英語版 *Octavian* には 2 つの系統があり、どちらも 14 世紀後半の成立と考えられている。本稿で扱う Southern version の他に Northern version が存在する。Purdie (2008: 214)に従って後者の詳細を記す。

(8)　'Northern' *Octavian*

i.　Manuscripts

　a.　Lincoln, Dean and Chapter Library, MS 91 (the Thornton manuscript). 15c, 2/4. NRY. (L)

　b.　Cambridge, University Library, Ff.2.38. later 15/early 16c. Lei. (C)

ii.　Print

　California, San Marino, Huntington Library 14615 (STC 18779). W. de Worde; prob. 1504–6.

Northern *Octavian*(以下、NO と略記)の行数は L 写本が 1634 行、C 写本が 1730 行で、詩形は $aa_4b_3cc_4b_3dd_4b_3ee_4b_3$ の典型的なテイルライム(尾韻)スタンザ(tail-

rhyme stanza)である。

これに対し Southern version(以下、SO と略記)はテイルライムではなく $aaa_4b_2a_4b_2$ ないし $aaa_4b_3a_4b_3$ という他に例を見ない詩形で書かれている。行数は1962 行で NO よりやや長い。

Octavian は、濡れ衣を着せられた高貴な身分の女性が追放され、あまたの苦難に見舞われながらも神の加護により最後は身内の者と再会を果たすという、中世ヨーロッパに広く流布したモティーフをもった物語で、フランス語版が現存する。英語版 *Octavian* にはプロットや細部でフランス語版との一致や言語面での対応が見られることから、McSparran (1986: 42–43)は、英語版 *Octavian* はフランス語版そのもの、あるいはそれに非常に近いテキストに由来する、ただし NO と SO の間に直接的な依存関係はないと考えている。SO にはフランス語系語彙の使用に関して注目すべき点、さらに詩人の多言語に対する意識を垣間見させる箇所が見られるので、以下、物語の展開に沿いながらそれらを検討していく。

まず SO の前半のあらすじを簡単に述べておく。

皇帝 Octavian はフランス王の娘 Florence と結婚し、双子の息子を儲ける。この結婚を快く思わない皇帝の母親は奸計をめぐらして息子たちが Florence の不義の子だと仕立て上げ、Florence は 2 人の息子(Florent, Octavian)とともに森へと追放される。Florent はサルに連れ去られたところを年老いた騎士に救われるが、騎士は無法者(outlaw)の一団に襲われ、Florent は彼らに連れ去られる。パリで屠畜業を営む Clement が巡礼行の帰りに彼らに遭遇し、Florent を買い受け、妻には自分の子と偽って養育する。一方、Octavian は牝のライオンが連れ去り養う。2 人の子どもを奪われた Florence は船で聖地に向かうが途中、Octavian とライオンに出会い、一行はそのままエルサレムにたどり着く。

Florent が 15 歳になったとき、Clement は自分の仕事を Florent に教えるため、雄牛 2 頭を自分の実の息子 Bonefey とともに売りに行くように命じる。その際、

60 シリング以下で売ってはならないと付け加える。

(9)　tasse (695)

And yf þou ham sel[l]est lasse,

As y mote her maytyns or masse,

Er þou eft fro my handys passe,

I haue yment,

I woll vpon þy body **tasse**

Well many a dent."　　(SO 691–96)

Clement は「もしも 60 シリング以下で売って帰ってきたら、しこたま殴りつける」と Florent に言い聞かせる際に tasse という語を使っている。この語について *MED* には次のように記されている。

(10)　*MED*, tassen (v.) [OF **tasser**; also cp. ML **tassāre**.]

To heap (sth.), pile, stack; also, *fig.* heap (many a blow upon someone's body); ~ **with**, burden (sb.) with (sth.), encumber.

MED にはこの SO の例を含めて 4 例の引用が挙がっている。一方、*OED2* (†tasse, *v.*)は *Obs. rare.* と注記し、この箇所からの引用を挙げるのみである。*AND* には tasser の項で'to stack (corn), heap up'の語義が見られる。ただし、引用例は少ない。

Florent は途中で騎士見習(squire)と出会うが、彼が右手に載せた「ハイタカ(sparrow hawk)」に心を奪われ、連れていた雄牛 2 頭と交換してしまう。この場面での「ハイタカ」を表す語の使われ方は興味深い。

(11)　spreuere (702)

That chyld answerede & seyde, "Nay!"

Þe bestys þey dryue forþ yn þe wey;

A3ens ham com þat ylke day
A stowt squyere,
And bar vpon hys ry3t hond gay
A fayr **spreuere**.

Tho seyde þat chyld Florentyn,
"God wold þat *sperhauk* wer myn."
Þe squyer seyd, "Be Seynt Martyn,
Bocherys sone,
For þo two oxen be he þyn,
Þys *faucone*." (SO 697–708)

最初 702 行の脚韻位置で spreuere が用いられている。この語について *OED2* (†sperver)は *Obs. rare.* と注記し、*Arthur and Merlin*, *King Alexander* および SO のこの箇所の各 1 例を引用している。*MED* は、姓を表す例を除くと *OED2* が挙げる 3 例に *King Alexander* からさらに 1 例を加えた 4 例を引用している。

(12) *MED*, sperver n.(1) [From OF **esprevier**, **esprever**, **esperv(i)er**.]

(a) A sparrowhawk; (b) as surname.

(a) c1330(?a1300) *Arth.& M.*(Auch) 5258: Agreuein tok þat destrer And fleiȝe þeron so a speruer.

c1400(?a1300) *KAlex.*(LdMisc 622) 4239: He meteþ a kniȝth wiþ a speruere..on a destrere.

c1400(?a1300) *KAlex.*(LdMisc 622) 7132: On his honde stant a speruers [LinI: spermerys]; He seeþ faire medes and ek ryuers.

a1500(a1375) *Octav.(2)* (Clg A.2) 702: A stowt squyere..bar vpon hys ry3t hond gay A fayr spreuere.

AND では次に示す通り esperver の形で採録されている。

(13)　*AND*, esperver

esperver, **essperver**, **espervier**; **esparver**, **esparvir**; **eçperver**; **esprever**, **esprevier**; **esprver**; **esprovier**; **asperver**; **sperver**

[FEW: 17,171b *sparwari; Gdf: 3,526b **espervier**; GdfC: 9,542b **espervier**; TL: 3,1254 **esprevier**; DEAF: Ø ; DMF: épervier; TLF: épervier 1 /épervier 2; OED: sparver n./sperver n.; MED: sperver n. 1/sperver n. 2; DMLBS: 3154b **spervarius**]

s. 1 *sparrowhawk*: Osturs, girfaus e espervers *S Gile* 1553; Esperver a perdrices et alowes et est femella, musket masculus a alowes *Glan lex* 176B; nisus: esperver *Gloss Nequam* 243.65; Hic nisus: esperver *TLL* i 419; hic nisus: esperver *TLL* i 426; alietus: esprovier *TLL* i 66; un [esprver] anglice sparhawke *Fr Voc* 332; 2 *a canopy for a bed*: Item, i esparver palez de tarterin vert, blanc & vermaille *Rot Parl*[1] iv 231; Item, i bolle pur ung esperver, d'arg' dorr' *Rot Parl*[1] iv 222

語義 1 の最後の引用例に「esperver は英語で sparrowhawk」とあり、英仏二言語併用の状況を窺わせる。

次のスタンザで spreuere は明らかに英語である sperhauk で言い換えられ(704)、さらにスタンザの最終行(708)ではより一般的に猛禽類を表す faucone が用いられている(脚韻語でもある)。この spreuere→sperhauk→faucone というバリエーションは esperver の意味を聴衆に理解させるための詩人の工夫と考えることができる。

OED2 には採録されておらず、*MED* では 1 例のみ SO から引用という、一種の hapax legomenon と思しき語も、*AND* を参照することで解決する。Florent が連れ帰ったハイタカに Clement が気づいて激怒し、Florent を殴りつける場面である。

(14)　sef (747)

In a rage Clement hente a staf

And Florent fele strokes he yaf,

And seyde, "Boy, tellest þou noȝt **sef**

My craft to lere,

To selle motoun, bakoun &beef

As fleschhewere?" (SO 745–50)

OED2 では sef を見出し語として捜し出すことができない。*MED* (sĕf (adj.))は 'pleasant, agreeable' と定義しこの箇所だけ引用しているが、*AND* を見ると以下のようになっている。*MED, AND* から得られる情報から判断する限り sef はフランス語の語彙と考えられ、ここではコードの切り替えが起こっていると考えてよいであろう。

(15) *AND*, suef

suef, seof, seuf, souef, soef, sowef, swef (sueif *S Rich* ANTS M405; **sueve);**
f.sg. **seueve, sueve, suieve, soueve, squeve, sweve**; f.pl. **seuves**

a. 1 soft, tender; gentle, easy; gentle, soft; smooth, even; calm, smooth (of sea); gentle, meek; (of a horse) quiet, good-tempered 2 sweet 3 pleasant;
adv. 1 gently; smoothly; calmly, coolly; tenderly, with kindness; comfortably; softly, quietly 2 (to hounds) steady! 3 sweet(ly);
s. pl. the meek

a. 1 *soft, tender*: Hé, Guilliam, que vous estez bien sueve du corps *Man lang* 87; ♦ *gentle, easy*: par ceo (= the stole) [il] bien les (= deacons) garnist K'il ount pris le seuf jug Crist *Corset* ANTS 1214; Bel vis aveit e beles mains, Cors eschiwid, suef e plains GAIMAR 106; ♦ *gentle, soft*: Bel vis aveit e beles mains, Cors eschiwid, suef e plains GAIMAR 106; ausi d'une joefne dou [ce rega]rdure [...] ou d'un soef tast crest un puant desir *Ancren*[1] 83.22; siglent amunt al vent suef *Trist* (D) 2575; ♦ *smooth, even*: la reule [...] ke reule e adresce le quer e le fet squef *Ancren*[2] 163.30; ♦ *calm, smooth (of sea)*: Mult suef e pleine est la me *Trist* (D) 2983; ♦ *gentle, meek*: Uns rois iert mult bon e suef, El mond n'ot nul meldre de li *Waldef* BB 368; Oreison l'enoint de douce e de squeve requeste *Ancren*[2] 22.1; ♦ (of a horse) *quiet, good-tempered*: [...] un palefroi Qui tant fut soef e privé *Dial Greg* 66vb; vus averez un palefrei swef e ben amblaunt *Boeve* 814; 2 *sweet*: Del douz odor li souef flaire *Dial Greg* 119ra; tant come le fruit est frees [...] et suef flerant *Sz Med* 38; (The Ceraunius) Bons sunges bels e sués (var. soez) done *Lapid* 52.592; 3 *pleasant*: N'est pas reison ne afaitement Que sués sount a tote gent Le[s] maladies *Rom 32* 101;

なお、*OED2* では suave の項で以下のような情報が得られる(初例は c1560)。

(16) *OED2*, **suave,** *a.* (*adv.*)

[a. F. *suave* (16th cent.), a 'learned' formation which took the place of the 'popular' OF. *soef*, *suef* (*suaif*):—L. *suāvis* sweet, agreeable:—**swādwis*, f. *swād-* (see SWEET

a.).]

SO の詩人に脚韻語としてアングロ・ノルマン語由来の語を用いる傾向があることは、次の例からも知られる。

パリに押し寄せたサルタン軍を迎え撃つ戦いに加わった Florent の獅子奮迅の活躍ぶりを見て彼に恋心を抱いたサルタンの娘は策を巡らし、Florent の元に逃げる。次の引用ではそれに気づいたサルタン軍側の慌てぶりが描かれている。

(17)　tost (1244)

Þat cry aros ynto all þe ost,
"As armes, lordynges, as armes **tost**!
Our soudanes doȝter wyth greet bost
Is ra[u]ysschyd vs fro;
Now folwen we to þe wateres cost
And sle our fo!"　　(SO 1243–48)

tost は *OED2* でも *MED* でも見出し語として捜し出すことはできないが、McSparran は tost に対してグロッサリーで'quickly'と与えている。さらに *AND* を見ると以下のようになっている。

(18)　*AND*, tost[2]

tost[2], **toust**; **tot**, **tut**, **tout** (**tosttz** *Oak Book* i 74)
adv. 1 speedily, quickly 2 soon 3 readily, easily

adv. 1 *speedily, quickly*: prendre l'alat (= the goblet) , E en repost tost l'enmalat *S Brend* MUP 318; 2 *soon*: Fortune [...] ki.l fist primes riche adés E tut povre tost aprés *Rom Phil* 28; 3 *readily, easily*: Encusé m'eussent en Romanie, tost en purraie perdre la vie *Resur* (P) 64

詩人が脚韻の制約から聴衆になじみのない可能性がある語を選ばざるを得なかったとしても、場面にふさわしいパフォーマンスが伴うことでその意味は理解されたのであろう。

全般的に見て、詩人は言葉を非常に注意深く扱っているように思われる。

Clement はかつて Arthur 王の宮廷で馬番をしていたという触れ込みでサルタンに接近し、彼が所有する 1 本の角を生やした馬を連れ去ることに成功する。その際に知恵をつけたのがサルタンの娘で、彼女はその馬の特徴を語る中で馴らし方について以下のように述べる。

(19) coye (1344, 1345)

For he hym makeþ wyth moche pryde
A nyse **coye**.

Þe **coye** ys wyth hys handys two
Clappynde togedere to & fro; (SO 1343–46)

この例における coye について、*OED2* も *MED* もこの箇所のみを引用例として挙げているが、以下の通り正反対の定義を与えている。

(20) *OED2*, †**coy,** *n.*[2] *Obs.* ⁻1 Encouragement of an animal by clapping the hands or the like.

MED, coie n. [Cp. **coi**] A pacifying gesture.

MED の説明に従えば、この語は Chaucer が『カンタベリー物語』の「総序の歌」において女子修道院長を描写する際に用いた'ful symple and *coy*'(GP 119)における coy の名詞用法と考えられるが、*AND* には次に示す通り、形容詞、副詞用法の coi はあっても名詞用法は収録されていない。SO の詩人は馬をおとなしくさせるためのジェスチャーを意味するこの語が特殊な、聞き手になじみのない語であることを認識していたので、直後(次のスタンザ冒頭)に具体的な説明を施したと考えられる。

(21)　*AND*, coi[1]

coi[1], **choi**, **coy**; **kei**, **koi**; **quei**, **quoi**, **quoy**; c.s. **coiz**, **quais** (f. **coeie**; **quieie**)

[FEW: 2/ii,1470b **quietus**; Gdf: 2,170b **coi**; GdfC: 9,119c **coi**; TL: 2,526 **coi 1**; DEAF: ∅ ; DMF: **coi**; TLF: **coi**; OED: **coy a.**; MED: **coi a. (and adv.)**; DMLBS: 2630b **quietus**]

a. 1 *quiet*: Mes il seent tut quoi *Horn* 1370; En la coie nuit oscure *Ancren*[2] 233.22; ♦ *quiet, silent*: li counte e li roi En i furent si coi Que un soul n'i parla *Cor* 108; Si fray iceo, par ma foy! Ore m'en suffrez un poy, si en soiez tot quoy *Rom Chev* ANTS 1442; ♦ *still, calm*: Bons fud li venz e la mer quieie: Ne lur estoet muveir lur greie *S Gile* 883; E pus soit le plaié mis sur une table tut quais, que les buaus repairent en lur propre liu *A-N Med* i 77.xxvii; 2 *in peace, undisturbed*: li reis d'Engleterre ne lur dist ço ne quei. Mais li buens reis de France ne l'en laissa pas kei *Becket* 4238; Mes ke […] il sente ke femme seie, Il me relerra tute queie *Ipom* BFR 8818; 3 *coy, demure*: Jo ai veu […] mult simple, duce e coye Mettre sun dru en male voie *Pet Plet* ANTS 1391;

adv. *calmly, quietly*: La rivere passent tut quoi *Proth* ANTS 5808 **chambre coie**, *latrine, privy*: les gouters qe viegnent de la cusyne et dé chambres coies *Sz Med* 226. **estre coi de**, *to be free from*: E si vuil que de vus seit ma terre mes queie *Horn* 1971. **se ester, se tenir coi**, *to remain silent*: Tut coy ce (=se) estiet lui chivaler; Colour sovent chaunge et mue *Amis* 724 (var. C14); Jeo me ting […] tot coiz ausi com fet li muz ke point parler ne puet *Ancren*[2] 209.24; se tiegne coye sanz response BOZ *Cont* 88. **sa (etc.) lange en coi tenir**, *to hold one's tongue*: Deu nus doint cest perillus faus mond fuir e nostre lange en coi si bien tenir *Ancren*[2] 244.6. **remaneir en coie**, *to lapse, stop*: La parole est remise en queie *S Gile* 2342
→ coiement

次に詩人の多言語に対する意識、関心の強さが現れていると考えられる箇所を取り上げて検討する。

サルタンの娘は父親の元から逃れてのちも、マホメットに対する信仰を捨てようとはしなかったが、Clement に諭され、ついにキリスト教に改宗する。

(22)　In Sarsyn speche (1264)

And sche answerede & seyde, "Nay,

Mahoun lawe ys well þe better lay."

But Clement prechede so to her þat day

In Sarsyn speche,

Þat sche was crystened yn Goddes lay

For dowte of wreche. (SO 1261–66)

Clement は巡礼に出たことがあった。巡礼の途中で多くの言葉に接し、中にはある程度習得できたものもあったろう。それゆえ(習得の程度は別として)彼女の母語であるサラセンの言葉で語りかけることが可能であった。この箇所は、信仰という人の心に関わることについて母語を用いて説得することの意味を詩人が理解していたことを示していると言えるだろう。

物語の最後で夫、父親、息子(Florent)と再会を果たした Florence が自分の境遇を語る次の箇所も巡礼の言葉の多様性を伝えるものである。

(23) pylgryms of fele langage (1844)

I gan to schypye at ryvage

Wyth **pylgryms of fele langage**. (SO 1843–44)

Florent の活躍に比べるとこの作品のタイトルにもなっている Octavian は影が薄いのであるが、多言語という観点からは興味深い例が見られる。

(24) The Donet (630)

Tho he was passed yres fyve,

He was ysette

To lerne gramer, þat wyll dyscryue

The Donet. (SO 627–30)

この箇所では、ローマ皇帝の息子である Octavian が 5 歳になって文法の学習を始めたこと、その際の教科書が Donatus の文法書であったことが示される。幼い Octavian が Donatus の文法書を用いてラテン語の初級文法を学ぶ姿は、14 世紀のイングランドにおける上流階級(エリート層)に属する人びとのラテン語学習の状況と重なり合うものであったろう。

SO においては Englys (English)が 1 回だけ現れる。

(25)　Englys (1510)

To rede yn ryme, hyt ys meruayle

Englys to schew

How many helmes, hauberkes, saunȝ fayle,

Ther wer tohewe.　　(SO 1509–12)

原文には解釈が少々難しいところがあるが、Englys を schew の間接目的語と取れば、「どれだけの数の兜や鎖帷子がそこで粉々に砕け散ったかを(フランス語の)詩で読み、イングランドの人々に語ることは確かに驚嘆すべきことである」と読むことが可能である。ここにはフランス語と英語の両方を相手に格闘する翻訳者としての詩人の本音が現れていると思われる。そう解釈すると、この作品で用いられている‘as seyþ þe romaunce’(666, 1519)や‘seyde þe Frenssch tale’(1705)は単なる line filler 以上の、実質的な意味を伴っていることになる。

6.　おわりに

SO の後半部分ではパリ近郊を舞台にローマ皇帝、フランス王を中心とするキリスト教国軍とバビロニアのサルタンを中心とするサラセン軍の総力を挙げた戦いが描かれる。またガリシア、スペイン、ロンバルディア、ドイツ、ペルシャ、ギリシャ、アラビア、マケドニアなど多数の地名が現れ、この作品に多言語の雰囲気を与えている。しかし、作品中に現れるフランス語やフランス語系の語彙、ラテン語やフランス語への言及、巡礼者の言語の多様性への言及などを考慮すると、詩人は表面的な舞台設定を超越したところで、同時代の多言語の状況に対する関心・認識を示したと言える。SO を、English も French も Latin も language も一度も現れることがない NO と対置した時、その特異さがいっそう明らかになる。SO は、その登場人物たちと同じように多言語使用の環境に置かれていた上流階級をその受容者として想定していたと考えらる。し

かし同時に SO には、Florent が格闘競技(wrestling)や石投げ(stone-casting)で力試しをする場面、騎士に叙せられた Florent が Clement の錆びついた武具を身に着けて初陣に向う場面、サラセン側の巨人と一騎打ちを行う場面、両軍入り乱れて戦う場面など、いわゆる'popular' romance を特徴づける要素も多数取り込まれており、多言語とは無縁の人々も楽しませる作品となっている。そこに SO が描く世界や、受容者として想定する層の幅の広さを見ることができる。

以上、Chaucer と同時代の多言語に対する意識のありようを探るために、Chaucer と関連があると言われながら今日ほとんど顧みられることのないロマンス *Octovian Imperator* を取り上げ、そこにみられる多言語の諸相を検討した。Chaucer が接した可能性があるとされる他のロマンス作品を「多言語」という視点から読み直すことで、中英語ロマンスと Chaucer との関係について新たな知見が得られるのではないか。Chaucer は「弁護士の物語」において、舵のない小舟で海に流され、各地を流浪する Constance が話す言葉を'Latyn corrupt' (MLT 519)と表現したが [7]、その言葉は実際にはどのようなものであったのか。*MED* は'faulty, incorrect (language)'という解釈を与えているが、多言語の視点に立てば異なった解釈も可能であるように思われる。

注

* 本稿は、日本中世英語英文学会第 32 回大会(2016 年 12 月 11 日　関西大学)におけるシンポジウム「チョーサーと多文化共生」において、「中英語韻文ロマンスにおける多言語的要素」と題して口頭発表した原稿に加筆修正を施したものである。

1. 永嶋他訳 (1981: 149)。
2. 英語に切り替わっている箇所をボールド体で示す。訳文は永嶋他訳 (1981: 184)による。
3. 永嶋他訳 (1981: 183–84)。
4. 永嶋他訳 (1981: 184)。原文は'The letter ends in a strange mixture.'
5. Shendl (2000: 81)は同じ書簡を引用し、'...the fact that CS (=code-switching) is found in a letter to the king seems to point to the basic social acceptability of this linguistic strategy'と述べる。

6. Burrow (1986: 124n3)は次のように指摘する。

Chester (*sic*) was possibly an acquaintance. A Thomas de Chestre appears together with Galfridus Chaucer among those to whose ransoms the king contributed in 1360. Both men had been captured by the French during the campaign of 1359–60.

7. MLT 519–20

A maner *Latyn corrupt* was hir speche,

But algates therby was she understonde.

テキスト

Benson, Larry D. gen. ed. (1987) *The Riverside Chaucer.* 3rd edition. Houghton Mifflin Company.

Laskaya, Anne and Eve Salisbury. eds. (1995) *The Middle English Breton Lays*. TEAMS Middle English Texts Series. Western Michigan University.

McSparran, Francis. ed. (1979) *Octovian Imperator*. Middle English Texts 11. Carl Winter.

McSparran, Francis. ed. (1986) *Octovian.* Early English Text Society, O.S. 289. Oxford University Press.

参考文献

Archibald, Elizabeth. (2010) "Macaronic Poetry." In Saunders, Corinne ed. *A Companion to Medieval Poetry*. Wiley-Blackwell. 277–88.

Baugh, Albert C. and Thomas Cable (2013[6]) *A History of the English Language*. 6th edition. Routledge. （永嶋大典他訳 (1981)『英語史』研究社出版．（原著第 3 版の翻訳））

Bradbury, Nancy Mason. (2010) "Popular Romance." In Saunders, Corinne ed. *A Companion to Medieval Poetry*. Wiley-Blackwell. 289–307.

Burrow, J. A. (1986) "The Canterbury Tales I: Romance." In Boitani, Piero and Jill Mann eds. *The Cambridge Chaucer Companion*. Cambridge University Press. 109–24.

Charbonneau, Joanne A. (2005) "Sir Thopas." In Correale, Robert M. and Mary Hamel eds. *Sources and Analogues of the* Canterbury Tales. Vol. II. D. S. Brewer. 649–714.

Davidson, Mary Catherine. (2010) *Medievalism, Multilingualism, and Chaucer*. Palgrave Macmillan.

Machan, Tim William. (2016) "The individuality of English in the multilingual Middle Ages." In Kytö, Merja and Pävi Pahta eds. *The Cambridge Handbook of English Historical Linguistics.* Cambridge University Press. 407–23.

Mills, Maldwyn and Gillian Rogers (2009) "The manuscripts of popular romance." In Radulescu, Raluca L. and Cory James Rushton eds. *A Companion to Medieval Popular Romance*. D. S. Brewer. 49–66.

西村秀夫 (2017)「*Lybeaus Desconus* 再読—"Unknown"から"Known"へ—」 *PHILOLOGIA* 48: 1–19.

Purdie, Rhiannon (2008) *Anglicising Romance: Tail-Rhyme and Genre in Medieval English Literature.* D. S. Brewer.

Rothwell, W. (1994) "The trilingual England of Geoffrey Chaucer." *Studies in the Age of Chaucer* 16: 45–67.

Schendl, Herbert. (2000) "Linguistic aspects of code-switching in medieval English texts." In Trotter, David A. ed. *Multilingualism in Later Medieval Britain*. D. S. Brewer. 77–92.

Schendl, Herbert. (2012) "Literacy, multilingualism and code-switching in early English written texts." In Sebba, Mark, Shahrzad Mahootian and Carla Jonson eds. *Language Mixing and Code-Switching in Writing: Approaches to Mixed-Language Written Discourse*. Routledge. 27–43.

Schendl, Herbert. (2013) "Multilingualism and code-switching as mechanisms of contact-induced lexical change in late Middle English." In Schreier, Daniel and Marianne Hundt eds. *English as a Contact Language*. Cambridge University Press. 41–57.

Schendl, Herbert and Laura Wright eds. (2011) *Code-Switching in Early English*. De Gruyter Mouton.

Severs, J. Burke gen. ed. (1967) *A Manual of the Writings in Middle English 1050–1500.* Fascicule I. Romances. The Connecticut Academy of Arts and Science.

Summerfield, Thea. (2013) "'And she answered in hir language': aspects of multilingualism in the Auchinleck Manuscript." In Jefferson, Judith A. and Ad Putter eds. *Multilingualism in Medieval Britain (c. 1066–1520): Sources and Analysis*. Brepols. 241–58.

Trotter, David A. (2006) "Language contact, multilingualism, and the evidence problem." In Schaefer, Ursula ed. *The Beginnings of Standardization: Language and Culture in Fourteenth-Century England*. Peter Lang. 73–90.

White, Denise C. (2012) *BL Cotton Caligula Aii, Manuscript Context, The Theme of Obedience, and a Diplomatic Transcription Edition*. Dissertation, Georgia State University.

辞　書

Anglo-Norman Dictionary (*AND*)　http://www.anglo-norman.net/

Middle English Dictionary (*MED*)　http://quod.lib.umich.edu/m/med/

Oxford English Dictionary 2nd ed. (*OED2*) CD-ROM Ver. 4.0